

平成29年度 青谷高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

創立69年を迎えた青谷高校は、平成11年から総合学科高校となり、2年次より4つの系列に沿いながら科目選択を行って学ぶ形態がとられている。「社会人として通用する人間を育てる」を学校ビジョンに掲げ、きめ細やかな指導が行われている。小規模であるため、ホームルームや授業における学習集団も小規模な編成が可能であり、管理職も含め教職員が生徒一人ひとりの状況をよく把握できている。数年前まで生徒指導上の困難を抱えていたが、近年は生徒も落ち着いて学習に取り組める状況へと変化・改善が確認できる。そのため、当時の状況を知る一部の教職員の中には、現状に満足している様子も見受けられた。また、さらなる学校の教育力向上に若手や中堅教職員を中心に意欲的な教職員がいるものの、教職員の負担増を懸念し、躊躇している雰囲気も同時にあるように見受けられた。現状の取組を今一度見直し、新たな負担を強いることなく取り組める方途（組織編成を含む）を模索されることを望む。現状に満足することなく、教職員、そして、地域も巻き込みながら「めざす学校像」を共有し、青谷高校にしかできない、青谷高校ならではの特色ある教育を、自信をもって展開されることを期待する。

以下は、委員会として評価し、今後も継続・発展していただきたい主な事項である。

- ① 学習指導も生徒指導も一人ひとりの教職員が熱心にきめ細やかに対応できている。結果として3年生の進路決定もおおむね順調で、例えば、就職については早期離職もほとんどない。上級学校進学に際しても、学校全体で支援を行っている。一人ひとりの生徒を大事にするその姿勢は教育の根幹であるため、継続・発展していただきたい。
- ② 総合学科であること、さらには、青谷という地域性を最大限いかした教育活動が展開されている。多彩な外部・地域人材の活用や特色ある授業の展開にあたっては、教職員による準備（計画立案や関係者との交渉等）に相当な労力を要していると思われるが、青谷高校の独自性をいかすためにも、今後も継続・発展していただきたい。
- ③ 特別な支援を要する生徒が増えつつある中で、具体的な指導法について意識が高まっている。専門的な研修を受け指導力の向上に努めている教職員を中心として、情報を共有しながら研修を深め、個に即した特別支援の在り方をさらに継続して追究されることを望む。

一方、以下は、今後改善していただきたい主な事項である。

- ① 学校ビジョンについて、今一度、教職員で議論・共有をされたい。生徒の資質・能力をより一層開花させるべく、ポジティブな学校ビジョンをより明確に提示されたい。「社会人として通用する人間」とは具体的にどのような人間を育てることなのか、そのために学校教育としてどこまでを目指すこととするのか（目標設定の再検討とキャリア教育計画との連動性等）、教職員間で共有をしたうえで提示されたい。
- ② 総合学科で選択科目が多いため、教職員の授業準備や教材研究に困難性を抱えざるをえない前提条件はあるものの、学校全体で教科の枠を越えた授業づくりのポイント（授業冒頭の本時目標の提示やICT活用、特別に配慮を要する生徒の指導法の工夫等）を研究し、基礎学力の向上に努められたい。
- ③ ②とも関連するが、校内研究をリードする常設の分掌がない。教職員定数削減の中で当該組織を新設できないということよりも、既存組織を再編して役割や業務従事のアプローチを見直すという方法も取り入れながら、恒常的に授業研究・教員研修を活性化していく風土を醸成し、授業改革や教職員の力量形成に関わる研究・研修部門の位置付けを明確にされたい。
- ④ 生徒の学習成果や「自分たちの学校」という主体的な意思を表すことができる環境を整えられたい。例えば、廊下や教室の中など、生徒たちの学びや学校生活の喜び・意欲が表せるような掲示物や空間の構築などを工夫し、生徒の“顔”が見え、活気が感じられる“学び舎”にされることを望む。